母児間輸血症候群を呈した一症例

◎福岡 星夜[1)]、吉田 雅弥[1)]、西山 陽香[1)]、内田 有咲[1)]、田中 希歩[1)]、山崎 卓[1)]
熊本赤十字病院[1)]

【はじめに】母児間輸血症候群(fetomaternal transfusion syndrome:FMT)は、分娩前または分娩中に胎児血が母体血中に流入することで発症する。正常な妊娠・分娩でも発生し、生理的な現象とされているが、稀に重症の FMT が発生すると胎児・新生児は貧血を呈し、生命に危険をきたすことがある。今回我々は、FMT を発症し、新生児に輸血を実施した症例を経験したので報告する。【症例】患児は自然分娩にて出生、感染除外目的で血液検査を施行したところ、Hb6.4 g/dL と高度貧血を認めたため、精査目的で小児科管理となった。母体は 30 歳代女性、妊娠歴は３経妊１経産、移植歴・輸血歴はなく、特記すべき既往歴もなし、血液型は AB 型 RhD 陽性、不規則抗体スクリーニングは陰性であった。【経過】出生直後の血液検査は、WBC 22,280/μL、RBC 174×10^4/μL、Hb 6.4 g/dL、HCT 20.5 %、MCV 117.8 fL、MCHC 31.2 g/dL、PLT 28.4×10^4/μL であった。患児の血液型検査(ABO 血液型はオモテ検査のみ)を全自動輸血検査装置 Erytra(GRIFOLS 社)で実施したところ、AB 型 RhD 陽性で、不規則抗体スクリーニング(LISS-IAT)、直接抗グロブリン試験(DAT)共に陰性となった。出生から 7 時間経過後、Hb 6.1 g/dL と低下が認められたため、交差適合試験で適合となった AB 型 RhD 陽性の赤血球製剤を輸血した。出産翌日、母体の HbF、α-フェトプロテイン(AFP)を測定すると、HbF 4.3%、AFP 5,324 ng/mL であった。【考察】母体は不規則抗体を保有せず、患児と母体の血液型も同一であったため、胎児・新生児溶血性疾患(HDFN)を発症するリスクは低いと考えられた。その他の原因も疑ったが、貧血となり得る出血や血液疾患の可能性は低いとされた。また、胎児・新生児の血液は HbF、AFP が高値であること、母体血液中の HbF、AFP が正常妊婦より高値であったことから、本症例は何らかの原因で患児の血液が母体血液中に移行して FMT が発生し、新生児貧血を起こした可能性が高いと考えられた。【まとめ】FMT が疑われ、輸血を行った症例を経験した。FMT は正常妊娠であっても発生し、出血量の把握や原因を明らかにすることが困難な場合が多い。胎児・新生児貧血を認めた際には様々なケースを予測し、行動していく必要がある。(連絡先：096-384-2111)